つながる、ひろがる、あつまる
ほわいえ
熊本県立劇場季刊誌

October, 2026 030
Kumamoto Prefectural Theater
Quarterly magazine

# KENGEKI foyer

旅する、県劇。

Special feature 1

## 変わらない価値を、未来へつなぐために

**～前川國男の建築思想と、熊本県立劇場のこれから～**

Special feature 2 公演レポート

**第68回 熊本県芸術文化祭オープニングステージ**

## マーラー交響曲第2番《復活》







# 変わらない価値を、未来へつなぐために

## ～前川國男の建築思想と、熊本県立劇場のこれから～

熊本県立劇場は、2026年10月1日から大規模改修工事のため、約1年5カ月にわたる休館に入りました。
開館から44年。今回の改修は、施設の安全性や快適性を高めるとともに、
これからも県民の文化芸術活動を支える劇場として使い続けていくためのものです。
なぜ、これほど長い時間をかけて改修するのでしょうか。
その理由をひもとくと、設計者・前川國男がこの建物に込めた思いと、
熊本県立劇場が受け継いできた価値が見えてきます。

### これからも、安全で快適な劇場であるために

今回の改修では、耐震強化を目的とした特定天井の改修をはじめ、コンサートホールと演劇ホールの座席改修、一部座席の間隔の拡幅、空調・排水等機械設備の更新、レストランの改修などを行います。

これらは、施設の安全性を高め、より快適な環境で舞台芸術を楽しんでいただくとともに、これからも長く劇場を使い続けていくために必要な工事です。

しかし、県劇の改修で大切なのは、設備を新しくすることだけではありません。前川國男が手がけた建築としての価値を守りながら、これからの時代にふさわしい劇場へと機能を高めていくこと。今回の改修には、その両立が求められています。

### 前川國男が託した、県劇というかたち

県劇の歩みは、1978年に建設準備室が設置されたことから始まりました。当時は多目的ホールが一般的でしたが、熊本では早い段階から、音楽と演劇それぞれに対応する専用ホールを備えた劇場が構想されました。設計を担ったのは、戦後日本のモダニズム建築を牽引した建築家・前川國男。ル・コルビュジエに学び、神奈川県立音楽堂や東京文化会館などを手掛けた前川にとって、県劇は公共ホールの集大成といえる作品となりました。「私のライフワークとしたい」と語ったとされるこの建物には、公共建築への深い思いが込められています。

### 長く使われる“社会の器”として

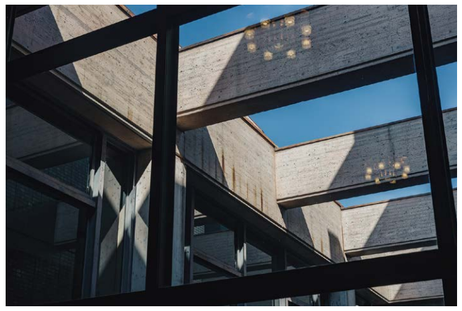
前川の建築思想を考えるうえで大切なのは、建築を一時の流行としてではなく、長く使われる“社会の器”として捉えていたことです。東京文化会館に関する解説では、前川は建築を「ファッション」とは異なるものと考え、素材や構法、空間の積み重ねから建築の質を形づくろうとしていたことが紹介されています。また、舞台そのものだけでなく、ロビーやホワイエのような、人が集まり、過ごし、行き交う公共空間を豊かに設計することも重視していました。文化を支える建築とは、ただ機能を満たす箱ではなく、人々の時間や関係性までも受け止める場所である――その考え方は、県劇の空間全体に息づいています。

### 「人に開かれた場」としての空間構成

その思想がわかりやすく表れているのが、県劇の空間構成です。北側にコンサートホール、南側に演劇ホールを置き、その間を東西に貫く「モール」が結んでいます。このモールは単なる通路ではなく、西側道路から東側駐車場へ抜ける動線であると同時に、2つのホールを音響的に分離する役割も担っています。さらに、モールには「光庭」と呼ばれるガラスで覆われた吹き抜け空間があり、建物の奥まで自然光を届けています。歩き、立ち止まり、光を感じる余白を備えたこの構成は、県劇を都市の中の開かれた







光庭にはガラス越しにやわらかな光が差し込み、県劇の内部に開放感と豊かな表情をもたらしています

公共空間として考えた前川の思想をよく伝えています。

### 芸術にふさわしい、2つの専用ホール

県劇の大きな特徴は、音楽と演劇、それぞれの上演特性に応じた2つの専用ホールを備えていることです。当時の公共ホールでは、「大ホール・小ホール」という規模による区分が一般的でしたが、県劇では音楽に特化したコンサートホールと、舞台芸術の多様な表現に対応する演劇ホールが設けられました。コンサートホールは、約2秒の豊かな残響と明瞭さを両立し、シンフォニー・オーケストラにふさわしい響きを目指した空間です。一方の演劇ホールも、可変ポータルをはじめ当時として高水準の舞台機構を備え、オペラ、バレエ、歌舞伎、文楽、小規模演劇まで幅広い表現に応える場として構想されました。

### 細部にまで息づく、前川建築の美意識

また県劇は、コンサートホールを「楽器」として捉えています。ホールの価値は、客席数や見た目の美しさだけで決まるのではなく、形状、反射、静けさ、材料、設備まで含めて、音がどう生まれ、どう届くかによって決まる。打放しコンクリートの矢羽根状の凹凸や表面のざらつきも、視覚的な特徴であると同時に、音を拡散させる役割を担っています。こうした意匠と音響性能の両立にも前川の設計思想が表れています。

### 使い継ぐために重ねてきた保全の時間

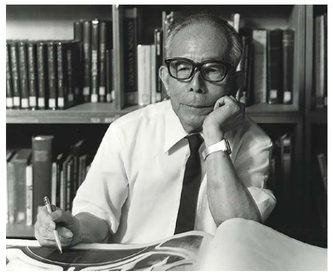
熊本県は、2005年に建物のライフサイクルを踏まえた改修・保全計画を立案し、2015年には実情に合わせた見直しを実施しました。同年にはコンサートホール舞台照明設備の改修が行われ、2016年の熊本地震ではその備えが生きたことも知られています。2020年には、長期にわたる適切な維持保全が評価され、BELCA賞ロングライフ部門を受賞しました。前川建築設計事務所・橋本功所長は、建築を100年残すためには、竣工時の姿をただ維持するのではなく、「何を変えてよく、何を変えてはいけないのか」を共有しながら、設計者、運営者、利用者、市民がともに建物を育てていくことが大切だと述べています。知ることによって愛着は“理由のある愛着”へと変わり、それが保存を支える力になる――その考え方もまた、県劇の未来に深く関わっています。

### 変わらない価値を守るための改修

今回の改修工事も、その歩みの先にあります。設計関係者は、今後の改修は一般の公共建築と同じ発想で設備更新するのではなく、ホール固有の音響や意匠、施工技術、設計思想を引き継ぎながら、「楽器として調律していく」ことが重要だと語っています。さらに、施工中にも見直しを重ねる「できるまで設計」という姿勢こそ、県劇を県劇たらしめている本質の一つでした。だからこそ、これからの改修でも、図面だけでは残らない「なぜこの形なのか」「なぜこの材料なのか」を記録し、次の世代へ渡していくことが求められます。設計関係者は「あんまり変わっていないね」と言われることこそが何よりの褒め言葉だと言います。この劇場の改修は、変化を誇るものではなく、守り抜かれた空間の質によって語られるべきものなのでしょう。

### 県劇の時間を、次の世代へ

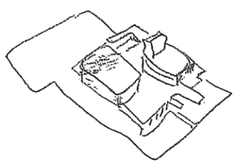
県劇は、前川國男が遺した名建築であると同時に、いまも県民の文化を受け止め続ける、現在進行形の公共空間です。専用ホールの先駆性、モールや光庭の豊かな構成、細部にまで宿る意匠、そして使い継ぐことを前提にした保全の思想。そのどれもが、前川の建築思想と深く結びついています。今回の改修は、古い建物を新しくするための工事ではなく、この劇場の精神と空間の質を未来へ手渡すための時間です。変わらない美しさを守りながら、次の世代へ。その歩みの中にこそ、熊本県立劇場という建築の本当の価値があるのです。



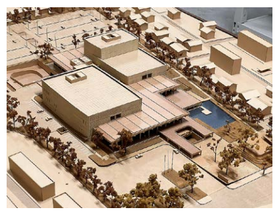
前川 國男（建築家）
MAEKAWA, Kunio

Profile／
1905年 新潟県新潟市生まれ
1928年 渡仏、ル・コルビュジエに学ぶ
1930年 帰国、レーモンド事務所に入社
1935年 前川國男建築設計事務所を設立
1940年代～ 公共施設を中心に多数の作品を手掛ける
1986年 逝去（享年81歳）

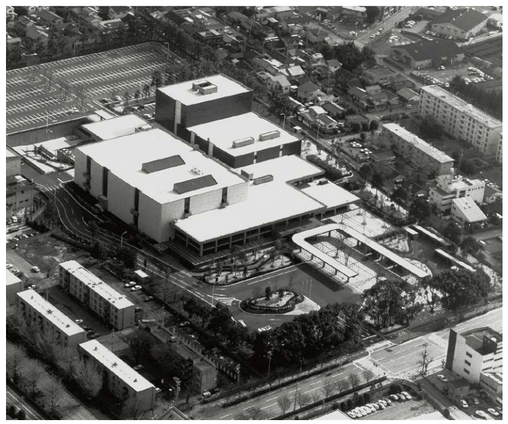
【主な作品】
神奈川県立音楽堂（1954年）、岡山県庁（1957年）、東京文化会館（1961年）、熊本県立美術館（1976年）、熊本県立劇場（1982年）



前川國男のスケッチ画。空間構想の骨格がここに表れています



計画段階の模型写真。ホール群の配置関係が立体的にわかります



開館当時の県劇全景。建築の構えと周辺に開かれた配置が見て取れます

## Notes

［全国各地で進む、劇場・ホールの改修］

- 東京文化会館（1961年開館）
  全面的な設備機器更新等の大規模改修工事
  【休館期間】2026年5月7日～2028年度中（予定）
- 滋賀県立芸術劇場びわ湖ホール（1998年開館）
  全面的な設備機器更新等の大規模改修工事
  【休館期間】2026年7月1日～2028年2月末（予定）
- まつもと市民芸術館（2004年開館）
  施設・設備の予防保全を図るための大規模改修工事
  【利用停止期間】主ホール：2025年10月～2027年3月
- ハーモニーホール座間（市民文化会館）（1995年開館）
  安全確保を目的とした天井改修（準構造耐震天井）
  その他長寿命化工事
  【休館期間】2024年8月1日～2026年10月31日
- 神奈川県立県民ホール（1975年開館）
  現在建て替えの基本計画を策定中
  【休館期間】2025年4月1日～　老朽化により休館







# 2度の震災に見舞われた熊本に、《復活》が響き渡った

**第68回 熊本県芸術文化祭オープニングステージ**
## 『G. マーラー／交響曲第2番《復活》』

平成28年熊本地震から10年の節目に、マーラーの交響曲第2番《復活》を上演しよう――。
第68回熊本県芸術文化祭オープニングステージは、そうした思いから準備が重ねられてきた公演でした。
県内各地から約300名の有志が集い、指揮の高関健さんのもとで音を育ててきたこの試みは、
令和8年熊本地震という新たな困難にも見舞われました。
それでも舞台は、本番へ向かう歩みを止めませんでした。《復活》に込められた祈りと再生のイメージは、
この日の熊本で、作品本来の意味を超えた重みを帯びて響き渡りました。

photo: ODASAKI, Tomohiro（小田崎写真事務所）

### 10年の節目に託された《復活》

今回の公演は、平成28年熊本地震から10年という時間の中で企画しました。死と再生、喪失と希望、静けさと高揚――マーラーの《復活》は、そうした相反する感情を抱え込みながら、大きな祈りへと向かっていく作品として知られています。だからこそ、この節目の年に熊本で取り上げる意味は小さくありませんでした。

県内から集まったオーケストラと合唱のメンバーは、それぞれの場所で音楽を続けてきた人たち。日頃は異なる団体や環境で活動する演奏者たちが、一つの作品、一つの舞台のために集う。そのこと自体が、この公演の大きな力になっていました。特別編成によるこの舞台には、単なる大作への挑戦にとどまらず、熊本で音楽をつないでいこうとする意志が重なっていました。

### 少しずつ、ひとつの響きへ

本番に向けた準備は、地道な積み重ねの連続でした。長大で複雑な作品だけに、リハーサル段階から、会場には独特の緊張感が漂っていました。高関さんは細部にまで耳を澄ませ、音の方向を丁寧に整えていきました。厳しさの中にもあたたかさを感じさせる導きのもとで、個々の音は少しずつひとつの響きへとまとまっていきました。

その歩みの途上で、7月末には令和8年熊本地震が発生。それでも演奏者たちは諦めることなく、音楽を届けるための時間を重ねていきました。震災から10年の節目に《復活》を演奏しようとしていたこと、そしてその準備の最中に新たな地震に見舞われたこと。その二つの現実が重なったことで、この舞台はより切実な意味を帯びていきました。

### 熊本に鳴り響いた祈りと再生

そして迎えた9月27日の本番。総勢約300人のオーケストラと合唱が舞台に並び、高関さんのタクトのもと、《復活》は重厚かつしなやかに立ち上がりました。大編成ならではの厚みのある響きは、ときに深い祈りのように、ときに前へ進もうとする意志のように客席へと広がっていきました。静かな場面では緊張をはらんだ集中が会場を包み、終盤へ向かうにつれて、その響きは大きなうねりとなってホールを満たしました。

約1400人の観客が見守る中で鳴り響く《復活》は、単に名曲の感動を伝えるだけではありませんでした。2度の震災を経験した熊本でこの作品が演奏されること自体が、ひとつの強いメッセージになっていたように感じられました。音楽がすぐに何かを解決するわけではない。それでも、人が集まり、耳を澄まし、同じ時間を分かち合うことには、確かな意味がある。そのことを、この日の舞台は静かに示していました。

### 鳴り止まなかった拍手の中に

演奏終了後、客席から送られた拍手は、なかなか鳴り止みませんでした。それは舞台の充実に対する率直な賛辞であると同時に、2度の震災に見舞われた熊本で、それでも前を向こうとする演奏者たちへの共鳴でもあったのでしょう。また、観客自身の、地震を乗り越えようとする静かな意志もまた込められていたように思われました。《復活》という題名が、この日ほど切実に響いたことはなかったかもしれません。音楽は、熊本の中で今も生き、人と人の思いを結び直しながら、次の時間へとつながっていく。そんなことを深く感じさせるひとときでした。



指揮：高関 健
TAKASEKI, Ken

Profile／国内主要オーケストラで重職を歴任し、現在東京シティ・フィル常任指揮者、仙台フィル常任指揮者、富士山静岡交響楽団首席指揮者。サンクトペテルブルグ・フィル定期演奏会など海外への客演も多く、世界的ソリストや作曲家、特にマルタ・アルゲリッチからは3回の共演を通じて絶大な信頼を得る、緻密なスコア分析からスケールの大きな音楽を作りだす名匠。新国立劇場での團伊玖磨「夕鶴」、ストラヴィンスキー「夜鳴きうぐいす」、チャイコフスキー「イオランタ」、2019年にはウラジオストクとサンクトペテルブルグでも「夕鶴」を指揮するなど、オペラでも高評価を得る。1987年より2025年まで熊本ユースシンフォニーオーケストラの指導を続けた。X（旧twitter）@KenTakaseki

【開催情報】
2026年9月27日（日）　熊本県立劇場 コンサートホール
出演／高関健（指揮）、安川みく（ソプラノ）、林美智子（メゾソプラノ）
　　芸文祭特別編成オーケストラ、芸文祭特別編成合唱団
曲目／マーラー：交響曲第2番《復活》

## Musician's Voice

［オーケストラ参加者の声］



7月28日の地震のあとは、本番ができるのかという不安が大きかったです。でも、開催すると聞いて、みんなでもう一度気持ちを入れ直すことができました。「復活」という言葉の重みも、あらためて感じました。練習を重ねる中で団員同士の思いも強くなっていって、本番がいちばんいい演奏になったと思います。今は疲れたというより、すごく清々しい気持ちです。来てくださったお客さまに感謝していますし、音楽の力を少しでも感じてもらえていたらうれしいです。

西村勇也さん
（1stヴァイオリン）



今回限りの特別なオーケストラだったので、終わってしまって寂しい気持ちがあります。本番は緊張もありましたが、周りの皆さんに教えていただいたことを少しでも出そうと思って演奏しました。大きな編成のこの曲を最後までみんなで演奏しきれたことに、達成感があります。私にとって今回は、二十歳の記念であり、10年前の地震をきっかけに始めたオーケストラ活動の一つの集大成でもありました。この経験をこれからの演奏にも生かしていきたいです。

横山美咲さん
（2ndヴァイオリン）

## 1 【利用団体リポート】
# 熊本大学フィルハーモニーオーケストラ



毎年活動している巡回演奏会の様子



山﨑 浩隆（やまさき ひろたか）
国立大学法人熊本大学大学院教育学研究科教授
熊本大学フィルハーモニーオーケストラ常任指揮者
提供：ユーツークラシカルレコーディング

1953年に創立され、地域に愛されながら歴史を重ねてきた熊本大学フィルハーモニーオーケストラ（通称：熊大フィル）。熊本県立劇場では開館翌年（1983年）の第20回定期演奏会を機に公演が開催されています。

現在は年2回のコンサートと県内15から20の小・中学校を訪れての「巡回演奏会」を毎年の活動としています。この「巡回演奏会」では、子どもたちに演奏を届け、実際に楽器に触れてもらう機会を提供し、音楽のよさを肌で感じてもらうことに力を入れています。

大学の夏季休業を利用して行う巡回演奏会は1日に複数校で演奏したり、1校で2回演奏したりすることもあり、演奏者にとってはハードですがこの貴重な経験を通して団員同士はもちろんのこと、子どもたちや関わるすべての人たちとの絆が深まり、音楽を通してのつながりがより広まっていくのだそうです。

この歴史ある楽団の指揮台に立ち、長きにわたり指導を続けてきたのが、同大学院教授の山﨑浩隆さんです。実は山﨑教授自身も熊大フィル出身で、前述の劇場初開催となった演奏会では現役団員としてステージに立っていたとのこと。2009年の赴任を機に指導者兼指揮者に就任し、これまで多くの学生と同じ目線で音楽を楽しみ、時間を共にしてきました。「等身大の親近感と、尊敬の念を両方持てる先生」――OBの中ノ森さんがそう語るように、山﨑教授は常にオケの真ん中で、団員たちと心を一つに音を奏でてきました。

そんな山﨑教授が今年度をもってついに退職を迎えます。この大きな節目に、これまでの感謝を込めた記念演奏会が去る9/21に開催されました。団名はその名も「山﨑記念フィルハーモニーオーケストラ」。親子2世代で参加したコンサートマスターの清永さんをはじめ、山﨑教授を慕う幅広い世代約80名がステージに集結。これまでの思い出深い曲を涙と笑顔で届けました。

熊大フィルのモットーは「音と心のハーモニー」と笑顔で語る山﨑教授。これまで教授と学生が共に培ってきた熱意や思いをさらに進化させながら、この先も熊大フィルらしい音楽を響かせてくれそうです。

## 2 【個性光る県内の公共ホール紹介】
# 大津町生涯学習センター（文化ホール）
（大津町）



上／様々な用途で利用可能なホール
右／中央公民館と一体となっており、複合的に利用可能



大津町文化ホール
熊本県菊池郡大津町引水62
（大津町生涯学習センター内）
電話：096-293-2146

大津町文化ホールは、優れた文化、芸能、音楽に親しみ、触れることによって、町民の文化意識の向上を図り、文化薫る町づくりを推進することを目的に、1983年に中央公民館との複合施設として開館しました。500席を備える多目的ホールは、出演者と観客の距離が近く、一体感のある舞台空間が魅力。コンサートや演劇、落語、講演会、ピアノ発表会など多様な催しに対応し、楽屋、リハーサル室、会議室、和室も備えているため、幅広い用途で利用されています。

国道沿いに位置し、約300台分の駐車場を完備。JR肥後大津駅から徒歩約15分、熊本空港からも近く、町内外から訪れやすい利便性があり、地域の文化活動や交流の場として親しまれています。主催事業では、大津町の様々な所属の代表で組織されている文化ホール事業運営委員会が中心となり、大津町ゆかりの著名人を招いた公演や子ども向け企画、新たな分野の公演にも取り組んでいます。さらに、熊本県立劇場との連携を通じて、優れた舞台芸術に触れる機会を創出し、専門的な知見やネットワークを生かした文化事業を推進しています。

大津町文化ホールは、文化芸術と地域活動をつなぐ身近な拠点として、多くの人が集い、学び、発表する場を提供してきました。これからも文化薫る町づくりを支え、人と人との心豊かなつながりを未来へ育む場として、重要な役割を担っていきます。

## 3 【舞台さんのお仕事道具】
# ～雪駄と足袋～



所作台の上では、必ず足袋を履きます

能・日本舞踊・歌舞伎などでは、地舞台（舞台床）の上に所作台という台を敷きます。所作台とは高価な檜の一枚板で作られた舞台道具で、足袋を履いて舞台上を舞う演者の足の運びや足拍子の響きをよくするために用いられます。

設営を行う舞台スタッフも、このときばかりは普段の安全靴ではなく演者と同じ足袋と雪駄を履いて作業します。雪駄で移動し、所作台の上では雪駄を脱いで足袋だけに。足袋は足の皮脂や汚れから所作台を守り、雪駄は足袋の汚れや摩耗を防ぐ役割を担っています。舞台は神聖な場所であるという伝統的な考え方もあり、檜舞台では素足や土足は厳禁。靴下も、皮脂汚れが付着するためNGです。設営の段階から舞台面を汚したり傷つけたりしないよう細心の注意を払います。

「舞台を汚さない」「傷つけない」という意識は、舞台に携わる人にとって基本となる心構えであり、大切なマナーです。

### 県劇職員が本音を綴るリレーコラム

## カーテンコールのその奥で

少し前になりますが、舞台「ハリー・ポッターと呪いの子」を鑑賞しました。書籍や映画の世界観を超えてくる生の舞台の迫力が目の前に繰り広げられ、あっという間にカーテンコールを迎えた感覚でした。開演までの時間、座席からステージ、天井、照明やスピーカーの位置、舞台袖の幕へと視線を巡らせます。舞台セットはもちろん、凝った造りのプロセニアムアーチや、壁にかかるドラゴンの照明など、気になるものばかり。上演中も、この素晴らしい空間を作り出す出演者と、公演を支える何十人、何百人ものスタッフの姿を想像しながらの観劇でした。

一つの公演が幕を開け、無事に終えるまでには多くの人が携わります。華やかなスポットライトを浴びるキャストの背後には、音響、照明、舞台監督といった高い技術を持つスタッフたちが、まさに「見えない主役たち」として控え、舞台を支えています。そして、私たち劇場職員の日常もその連鎖の中にあります。公演を企画して広報や券売を行う制作者。主催者の要望を汲み取り、最高の舞台へと導く伴走者。お客様を笑顔で迎えるスタッフや、劇場を快適な空間に保つ技術者。目立たない存在ですが、誰一人欠けても、あの「あっという間にカーテンコール！」の感動は生まれません。

県劇に限らず、次に劇場へ足を運んだ際は、そんな「裏方」にいる人たちにも少しだけ想像を巡らせてみてはいかがでしょうか。表からは見えない細やかな気配りや仕掛けに気づくと、いつもの舞台の見え方も変わってきます。この音のタイミング、この照明の切り替わり、カーテンコールで感じる一体感。そんな「裏側の魔法」を探してみるのも、劇場の新しく、そしてきっと面白い楽しみ方になるはずです。



事務局長 宮家 郁子（みやけ いくこ）

KENGEKI Recommend

熊本にいながら、インドに出会える食堂
## インド食堂





写真はベジタリアン。
動物由来の材料を使用しない
完全菜食メニュー。

代表の松本恭攻さんが東インド・コルカタの食堂へ飛び込みで弟子入りし、修業を重ねて磨いた味を、故郷・熊本で20年以上守り続けています。目指すのは、毎日食べても飽きない本格的なインドの家庭の味。ランチは「ベジタリアン」と「ノンベジタリアン」の2本柱で、夜はチャパティも並びます。料理は提供時点であえて「半完成品」とし、副菜や和え物をお客さまが自身で混ぜ合わせて好みの味を完成させるという本場流の食べ方が楽しめます。コロナ禍には帰国できないインド人の心の支えにもなったのだそう。お料理も店内の雰囲気も、熊本にいながらまるでインドを訪れたような時間に出会えるお店です。

**インド食堂**
熊本市中央区大江5-12-11（県劇から車で約3分）　TEL.096-371-6528
営業時間／昼の部11:30～14:30、夜の部17:30～19:30
定休日／毎週水曜日と第2・第4火曜日　駐車場／3台

ホームページ

熊本県立図書館タイアップ企画
## 『本の中にある劇場』

熊本県立図書館 情報支援課 主任主事　松尾 美里（まつお みさと）

美しい照明。開演前のざわめき。ホールで過ごす時間はなぜあんなに非日常的で特別なのでしょうか。

この本は京都コンサートホール三十周年を機に編まれたアンソロジーで、様々な分野で活躍される16名によって音楽をめぐる豊かな経験が綴られています。ジャングルから見る音楽の未来、ホールがかける魔法の正体。音楽家の足跡や聞き手としての音楽の楽しみ方。

ホールで音楽を聴くというのはどんな体験なのか。鋭い感覚と洞察力、それぞれが持つ専門知識のもと巧みに語られる音楽論はどれも柔らかなタッチで読み終わるのもあっという間です。音楽に思いを馳せる1冊としていかがですか？



『超楽器』
鷲田 清一／編
高野 裕子／編
山極 壽一 ほか／著
（世界思想社／2025年10月）

※県立図書館とのタイアップは2007年度から続いています。
このコーナーでは、図書館職員おススメの一冊をご紹介します。

# Information

## 県劇からのお知らせ

熊本県立劇場は、特定天井の改修工事に伴い、1年5カ月という1982年の開館以降最も長い期間、一時休館いたします。建物には一休みしてもらうけれど、県劇は歩みを止めません。それを皆さまに伝えるためにはどうすればよいか、職員で話し合い生まれたのが「旅する、県劇。」というキャッチフレーズ。活動の場を県下全域に広げ、これからも文化芸術を届け続けます。



あなたのまちへ、感動を届けに。

### 旅する、県劇。

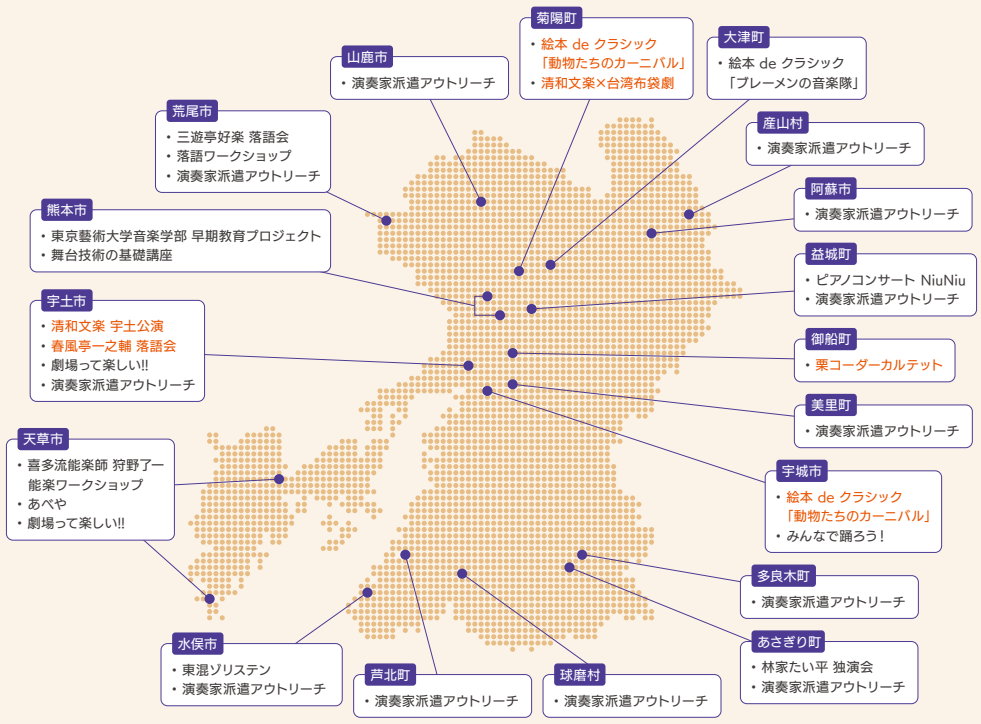
改修工事のあいだ、県劇は旅に出ます。
行き先は、熊本県内のいろんな場所。
演じたり、奏でたり、創ったりしながら、
劇場の感動を届けていきます。

子どもたちのキラキラしたまなざしや、
地域に根づく文化、
人と人とのあたたかなつながり。
それらにふれることで、県劇自身もまた
熊本の大切なものを見つけ直していきます。

建物を離れる今だから
もっと熊本のみんなの日常に、劇場を。
あなたの街で、待っていてください。

### ◎ 公演・ワークショップについて

2026年度は県劇を飛び出して、公演やワークショップを実施します！




朱字の公演は令和8年熊本地震の影響で、中止・変更が生じています。
詳細は、各市町村やホールのホームページ等をご確認ください。

大規模改修工事は2028年2月まで実施予定です。
2027年度も引き続き、県内のさまざまな場所で実施する公演やワークショップにご期待ください。

※工事の進捗状況によっては、閉館期間を延長する場合があります。

### ◎ 改修工事期間中の仮事務所について

県立劇場近隣の仮事務所にて、継続して業務を行います。

**【熊本県立劇場 仮事務所】**
**営業時間**／9:00～19:00（休業日あり）
**所在地**／〒862-0971 熊本市中央区大江3-2-30 肥後銀行学園大通支店2階
※電話・FAXの番号は変わりません




### ◎ 熊本県立劇場駐車場の閉鎖について

熊本県において、県立劇場の耐震強化のための大規模な改修工事に伴い、下記のとおり駐車場を閉鎖いたします。ご利用の皆様にはたいへんご不便をおかけしますが、ご理解、ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

**閉鎖期間**／2026年10月15日から工事終了まで（2028年2月の予定）
**閉鎖理由**／大規模な工事であることから多数の工事車両の行き来が生じ、駐車場利用者の安全面の確保が困難であるため

KUMAMOTO PREFECTURAL THEATER

企画・発行／公益財団法人 熊本県立劇場
〒862-0971 熊本市中央区大江2-7-1（※休館中は上記仮事務所で営業いたします）
TEL.096-363-2233　FAX.096-371-5246　www.kengeki.or.jp

art direction & design: TAMURA, Mio
editor/writer: TAKEDA, Akihiko (Impressions, inc)
cover illustration: USUI, Toshirou

表紙イラスト／変わらない価値を守り、未来へ手渡していくための改修工事に入る熊本県立劇場

発行日／2026.10.20　※掲載内容は2026.9.30現在のものです

### 県劇プレイガイドにてチケット好評販売中 !!

- **11.1 SUN** 三遊亭好一郎 ましき寄席
  会場／益城町文化会館
- **11.14 SAT** 弥永歩美 フルートリサイタル Vol.3
  会場／日本副音ルーテル健軍教会
- **11.14 SAT** グランプリコンサート2026 モータス・クァルテット
  会場／益城町文化会館
- **11.14 SAT** ループくまもと ミュージックフェス
  会場／市民会館シアーズホーム夢ホール
- **11.21 SAT** 石川さゆり コンサート
  会場／水俣市文化会館
- **12.6 SUN** 熊響 特別演奏会
  会場／ひぎん うるおいホール
- **12.13 SUN** DRUM TAO 2026『THE HUMAN2』
  会場／熊本城ホール
- **12.19 SAT** KAORI PARADICE 2026
  会場／水俣市文化会館
- **2.11 THU祝** 11/1～発売 第52回九州公演 日本フィル in 熊本 2027
  会場／市民会館シアーズホーム夢ホール
- **3.28 SUN** ヨハン・ゼバスティアン・バッハ ヨハネ受難曲
  会場／荒尾総合文化センター

9月末現在の販売状況です
各公演の詳細や、その他公演チケットについては、県劇公式ホームページでご確認ください

## 館長室から

### 「帰還」という「成熟」

古代の叙事詩的な物語を、IMAXフィルム撮影を通じて壮大なスケールで蘇らせたクリストファー・ノーラン監督の映画『オデュッセイア』が世界的な話題をさらっている。

このホメロスの古典を最初に読んだとき、人物の描き方が定型的で、要するにトロヤ戦争の英雄のひとり、オデュッセイアという男が艱難辛苦の果てに最愛の母子の待つ故郷、イサカ（イタカ）に帰る「帰郷」の物語だと思っていた。

しかし、数十年ぶりに読み返し、恋しい故郷に「帰る」（ホームカミング）物語ではなく、過酷な試練や未知との遭遇を経て、精神の成熟や自分の存在を全うして元の場所にたどり着く物語であることに気が付いた。それは、「帰郷」（ホームカミング）ではなく、ギリシア語を由来とする「帰還」（ノストス）を指しているのだ。

日本のモダニズム建築を代表する我が熊本県立劇場は、10月から1年5カ月、修復のため「休館」となるが、県劇は、「旅する、県劇。」をスローガンに、アウトリーチなどを通じて地震の被災地などに積極的に関わっていく予定である。

そして1年5ヶ月後、県劇はオデュッセイアのように、元の場所に「帰還」した時には、より成熟し、進化した県劇の姿になっているはずです。ご期待ください。



館長室から